中国佛教への道しるべ

横超慧日

どんな学問でも、順序があり階程がある。それを心得ているといないとでは、同じ努力を払っても成果に大きな違いがでてくる。ところが最近では、大学へ入っても三回生になってから専攻の学科をきめ、やっと佛教学科を選ぶことにしたところで、一年位はすぐ経ってしまう。そこでまだ佛教学の中の西も東もわからぬうちに（一寸と大げさすぎる言い方だが—）、卒業論文に手をつけねばならんことになるから、誰しも面くらうのは当然だ。卒論題目は何にしようかとよく相談がかけられるけれども、無理もないこと。結局は教授から題目を与えられてそれ一筋に打ち込むことになるが、研究のための資料の所在もわからず、それをどのようにこなしてゆくかもわからぬ。それが佛教学全体の中でどんな地位を占める問題かというに至っては、卒業論文ができあがってもよくはわからぬということになりかねない。そして若し学者として身を立てることになれば、その卒論題目選定の第一歩が、大きくその人の一生の学問を性格づけることになるから、そう考えてみると出発点は極めて重大だということになる。走り出してから途中でウロウロしては困る。では最初にどんな用意をしてかかるがよいか。

支那学の方では、長沢規矩也氏の「支那学入門書略解」という本（文求堂）があり、京大の人文科学研究所から出た「東洋史学入門」という本もあって、夫々研究者のために必読書を教えている。最近では上海書局からと商務印書館からと、別々に中国人によって書かれた著者の異る「国学常識答問」という同名の入門書が出ていて、その方面の学生には役立っている。然し佛教の方では簡単な手頃な参考書がない。深浦博士の「佛教研究法」などあるにはあるが、私は自分なりに中国佛教関係の手引きを書いてみることにする。入門書の解説というより、私

が自分でやってきた勉強の仕方を書いて、かどでに立つ人の参考になればと思う。或は却つて迂遠な道で、早急に成果を挙げる方法でないかも知れぬが、他山の石ということにもなれば幸である。

中国佛教を研究するのは、色々の意味がある。第一に、尨大な聖典を持っている。インドの経律論も漢訳されてそれの研究書と共に漢文大蔵経となっている。その量の大きさから言って他に比類がない。第二に、長い歴史を持っている。盛衰消長はあっても二千年に亙り、思想的に社会的に文化的に、人類の歴史上輝かしい足跡を残してきた。第三には、日本佛教の母胎となった。明治以降は別として、それまでの日本の佛教は、みな漢文に翻訳された経典を、中国の学者が領解し発揮したところの学問、信仰の上に成長してきた。第四に、インド思想とは異なる固有の文化を地盤として受容された。同じく受容と言っても、日本への場合とは大分様子が違う。その他等々。だから、中国の佛教を知るということは、インド佛教や日本佛教を学ぶ人にも、中国の思想史や文化一般について研究する人にも、決して看過できぬ意味を持っている。ところがその中国佛教は、本格的にとり組もうとする人が案外少い。佛教はインドで起ったからというので、原始佛教や大乗佛教を研究する人は多い。そして或る人たちはこう考える。中国の佛教はどうせ翻訳したものの上に成立しているのだから、今日の如く原典研究の盛になった時代には、もう余り価値がなくなった。註釈にしたって、中国で作られたものは本来の意味から離れた附会の説があるようだから余り信用できぬ。そう考えてインド佛教を専門とする学者からはとかく軽視され易い。又或人たちはこう考える。現在の日本で行われている佛教は、法然、親鸞、道元、日蓮など日本で深い意味を見出された信仰だ。だからそれら諸宗の先駆者という意味では、中国高僧の教も尊重さるべきだが、何と言ってもまだ不徹底だ。そう考えて日本佛教を専攻する宗学者たちからは、自宗の祖師に関係ある範囲内だけが研究される。そうなると中国佛教は、パーリ語や梵語の原典研究に主力を注ぐ欧米の学者には余り手がつけられず宗派意識にとらわれ勝ちな日本の佛教徒からは狭い視野からしか眺められず、そうかと言って現在の中国の人々も一つのイデオロギーに立ち自国の祖先が歩んできた大きな宗教上の足跡を公平に研究して正当に評価しようとはしていない。中国佛教の教団史的研究は近年稀でない

けれども、純粋に思想史若しくは教学史としての組織だった業績は今日まだ公にされていないと言っても過言でない。これから此の道に入ろうとする若い学徒の皆さんには、大きな領域が開拓されるのを待っている。他の分野の研究に対する補助学ということでなく、思想史として中国佛教を専門に志す人々の輩出を望んで止まぬ。

P・Rはこの位に止めて、初めて中国佛教に手を染めようとする人に向って、一般的な心がまえから述べてみよう。何と言っても先ず第一に漢文で書かれた聖典に慣れ親しむことが先決問題だ。私などは、寺に生まれたから小さい時から阿弥陀経を読まされた。中学は名古屋にある佛教関係の学校だったので、別科として三年四年の頃には八宗綱要という本を教えられた。日本でできたものだがむつかしい漢文で書いてある。五年の時には大乗起信論を、殆ど意味わからずに習ったことを覚えている。然しこういう経歴がその後自発的に佛教を研究するようになつても、大変役に立ったと思う。佛典に出てくる用語は、漢音・呉音・唐音・宋音などいろいろあるが、大体大した間違いなく読めるようになったのもそのお蔭だと思う。発音はどうでもよいということは言えない。昔ある有名な哲学者の講演を聞いていたら、しきりにバメイボサツという語がでてくる。気をつけて聞いているとなんとそれは起信論の著者と言われる馬鳴（メミョウ）のことであった。往年中国へ旅行した時、早稲田大学卒業の中国人技師が、山西省大同で盛んにカゲンジという語を連発した。何のことかと思ったら華厳寺（ケゴンジ）のことだった。無理もないとは思うが、バメイやカゲンジでは通じないから、やはり伝統的な読み方を覚えねばなるまい。固有名詞や術語の正しい読み方と類似の文字の正しい字画を覚えることが必要だが、同時に漢文の文章そのものに習熟することが大事だ。私の中学時代には一年から五年まで漢文の教科書があって、正科になっていた。自然に中国の古典についての知識も習得できることになっていた。然し今日ではそれがない。インド佛教に必要な梵語やパーリ語等は、文法書もあり、辞書もある。それによってみんなが確実についてゆける。それにひきかえ漢文には文法書というようなものがなく、あっても余り高級なもので初歩的なものがない。辞書にしても、英語や独乙語の文を読む時ほどには漢和辞典が利用されない。漢和辞典があまり利用されぬのは、文字の細かい意味も知らぬままにめいめい大体は心得たつもりにな

っているからだ。だから益々以て難解になる。そこで佛典に限らず、論語や易や老子や荘子などの中国古典に平素から親しんで、辞書も漢和辞典の他に「辞海」（中華書局）か「辞源」（商務印書館）などの中国で出来たしっかりした辞書一冊は常に座右に具えておきたいものである。もつとも、そういう論語などの古典にしても辞海などの中国出版の辞書にしても、最初からそう簡単に読めるものではないから、初は古典の細かい意味の詮索より大意を考えながらの素読がよい。辞書は面倒がらずに中国の辞典と漢和辞典を併せて使用し、進むに従って何につけても事毎に辞海などをひいてみるというようにしたい。小さいものでは、「支那文を読む為の漢字典」（文求堂）というポケット用のものが便利だ。

漢文に習熟するには三つの方法がある。一つは国訳大蔵経や国訳一切経などと対照しながら、忠実に原文をたどってゆく方法。一つは訓点のつけてある和刻本によって、本文に即しつつ訓読のしかたを覚える方法。一つは句読点だけあって、返り点や送り仮名のない本を、どんどん読破し、細部の字義をあとまわしにして先ず大意を捉えようとする方法。国訳というのは書き下し文（延書）にするのをいうから、いつまでもそれに頼っていると漢文読解力は上達しない。又書き下し文にすると、正確にもとの意味を伝えにくいという場合があり、誤解を招き易い。例を挙げてみよう。火之伝於薪猶神之伝於形という文は、「火の薪に伝わるは、神の形に伝わるがごとし」と書き下されるが、この書き下し文だけを見ると、「火が薪に伝わること精神が肉体に伝わるようなものだ」と解されないで、何か「火の薪」とか「神の形」とかいう一連の語のように誤解されぬとも限らぬ。前形非後形の文でも、「前形、後形に非ず」と書き下されると、「前形は後形でない」という意味か、「前形でも後形でもない」という意味か、はっきりせぬ場合が起る。それだけでなく、原文のままならば、視覚に訴えて文意が一括して感じとられる所を、仮名交りの書き下し文のため見ただけではまとめて意味をつかみにくいことにもなる。だから書き下し文は意味のとり方について参考にする以外は、余りそれに頼らぬ方がよい。

それから一般に多く用いられるのは返り点や送り仮名のある本を読む方法である。此も或る程度までは必要で漢文の訓読法を習得する上に大いに役立つ。然しそれも絶対視すると、とんでもないまちがいを引きおこすこと

がある。返り点や送り仮名をつけるというのは、その文章に対する理解・解釈を示すものであるから、理解・解釈が違ってくれば訓読の仕方も違ってくる。例えば、貪著小乗三蔵学者とある文でも、「小乗に貪著する三蔵学者」と読むか、「小乗の三蔵に貪著する学者」と読むかで、意味が変ってくる。若しも意味を正しくとらえないで返り点などがつけられていると、却ってそのために読む者がひきずられて間違いをうけつぐこととなるから、そういう場合には寧ろ返り点などない方がよい。昔から読みならされてきたものでも、佛教者の読み方にはどうかすると無理な読み方をした例がないではない。だから多く読んで自然に体得した経験と、常に前後の意味を考えながらその場その場の正確な意味を考えてゆくという心がまえとによって、成るべくは句読点だけあって返り点や送り仮名のついておらぬ文章を読みなれるようにしたいものである。これは文学書などの場合はむつかしいが、佛書の場合は、出てくる用語に大抵きまった術語が多いから、その術語に通じておればそうむつかしいものではない。但し翻訳された経典でも羅什以後のものに比べると、それ以前のもの（古訳）は訳語が一定していないからむつかしい。又経典などに比べて中国の人が書いた文章は難解で、それも古いもの程むつかしく、隋唐頃のものになるとよほど読みよい。いつの時代でも中国の人の書いた文には故事や成語が多く使われるから、そういうものに対する知識は平素之を養成する心がけを忘れぬことが大事で、佩文韻府などできるだけ多く利用することを勧めたい。

私は本を読む時に朱を使うことにしている。朱引きと言って、昔から本の中に出てくる固有名詞には文字の中央や左右に朱線を引いたものだ。地名、人名、書名、年号など、それぞれ引く位置に慣例があったようだが、それは各自に工夫して一定しておけばよい。書名や人名など、之をやっておくと後から調べる時にとてもちょうほうだ。それから意味内容の上から段落の切れ目に「印を入れることにしている。これは文意の推移を始終注意していなければできぬことだから、章段の明白なところや問答の場所などは間違えることがないけれども、細かな所になると、初歩の時に加えた朱が後から見て不適当になったりすることがある。それにしても、こういうように朱を入れておくのは、後から読み返してみる時意外な助けになるものである。私は善本を集めて秘蔵するより

も、実用的な本でそれに朱線を引いたり、句読点を入れたり、段落を切ったりして、できるだけ親しみ深いものにするのを主義としている。

さて漢文佛典を読むについての一般的な用意はそれまでとして、中国佛教を研究するには、どんな本を読んだらよいか。言うまでもなく中国の人が書いた佛教書について研究しなければならんが、それらの根本になるのは何と言っても経律論であるから、先ず主要な経と主要な論に目を通しておかねばならぬ。中でも、

般若経　維摩経　法華経　勝鬘経
涅槃経　楞伽経　金光明経
解深密経　無量寿経　観無量寿経

など、これらの経典については必ず一往の知識を持っていなくてはならない。どんなに法華玄義を精読しても、法華経を熟読した上でなければ、恐らく全く何のことかわかるまい。否、法華玄義を理解するためには、法華経だけでは不可で、前に挙げた諸経は全部一往研究した上で初めて、法華玄義に見られる智顗の思索の深さが知られる。論で言えば、

智度論　中論　無量寿経論
法華経論　摂大乗論　十地経論
成唯識論　倶舎論　起信論

など、これらについて或る程度の素養を持っていなければならぬ。もちろん三論宗関係の研究には三論を、法相宗関係の研究には成唯識論を精究しなければならぬが、三論宗にしても法相宗にしても、決して三論や成唯識論だけでかたづくものではない。昔からよく、天台・華厳は実大乗で、法相・三論は権大乗、倶舎・成実は小乗だなどと言われた。そうしてそのくせ、天台を学ぶには倶舎の素養が必要で、華厳を学ぶには法相の基礎がなくてはならぬと称されてきた。或る論を小乗ときめたり、大乗の中で権大乗・実大乗などを分けるのは今日の学問からは問題だが、然し天台の学説が倶舎(毘曇)・成実の基盤に立ち、華厳の学説が法相唯識を根底としており、共にそれらの上に独自な思索が展開されたものだということは事実である。だから法華経と法華玄義を読んだだけで天台大師智顗の真意がわかり、華厳経と探玄記を読んだだけで賢首大師法蔵の特色が知られると思ったら、それはとんでもないまちがいだと言わねばならぬ。どの一つの宗派なり、どの一つの著述なりを研究するにしても、それの背景となっているもの、それの基盤となっているもの、それの対象となっているもの、それに資料を与え

たもの、それに核心的指針を示唆したものというように色々な角度から検討しなければならぬ。中でも前に挙げた経や論などは、何時代を研究するにしても、又何宗を調べるにしても、凡そ中国佛教を研究しようとする者なら、すべて一往は素養としてそれらに対する基礎知識だけは持っておらねばなるまい。ともかく、一番もとになる経論を研究しないで、いきなり中国の著作を研究するというのは、全くナンセンスだということだけは強く銘記しておいてほしい。

ここで一つ注意しておきたいことがある。「自分は法華宗だから、法華経を研究しようと思う、法華経を研究するには多くの注釈書があるというが、天台の法華文句が有名だからそれによって法華経を読もうと思う。このように考えて、法華文句を参照しながら法華経を読みかけたけれども、経文の字句の説明がなくて、何だか自分の意見ばかりふりまわしている。結局、法華経を読むのに、法華文句は何の役にも立たなかった」。「自分は浄土教徒だから、無量寿経を研究したい。そこで梵文の無量寿経を研究してみたが、その中に第十八願がはっきりしておらぬ。してみると、曇鸞や親鸞など中国や日本の浄土教徒が信仰の根拠としている所も、根本から崩れるではないか」。前者は、法華文句に単なる字句の注釈を求めたもので、それはそういうことを期待して求める方が見当違いというものである。中国で作られた註釈書にも色々な立場があるから中には字句の解釈をしたものもあるが、左様なことはどの註釈書にあっても主たる目的ではなかった。およそ中国での註釈書というものは、佛教思想全体を見わたして、自己の佛教信念に基いて経文を解釈してゆくのである。故に誰が見ても異論のないような字義の解釈は、決して本意とする所ではなかった。そういう書物に対して、初歩的な字句の釈義を求めるというのは、期待そのものが既に誤まっていたと言わねばならぬ。われわれは経典をまず表面的に字句の通りに自分で読んでみるがよい。その上で、色々の観点が出てくる。文学的考察、社会的背景、外教との交渉、先行経典との関係、成立過程の検討、文献としての相互的関連究明、語学的見地よりの詮索等、近時学者の間でとりあげられている研究視野は広い。然し、昔の中国の学者は、曾てそのようなことを中心課題とはしなかった。彼等はその経の中から、自分の人生観を見出した。自分が生きてゆく上での指針を見出した。それは字句の行間から、おの

ずから汲みとられるという性質のものではない。自分の体験を通して読みとられたものであり、自分の信念として生きるための力になったものである。だから、われわれも、一往経典の文面が理解されたならば、単に研究の資料素材として見ることに止めず、その中から自分にとってどんな意味があるかを求めねばなるまい。単に客観的研究の資料素材としてのみそれに接するならば、それは科学者の仕事であり、宗教の任ではない。自己の人生観、そこにこそ中国の経典註釈家が情熱をこめた目のつけ所があったのである。こういうことがわかってくると無量寿経の梵文に第十八願があろうとなかろうと、そのようなことで我々は、無量寿経の中の第十八願を重視した曇鸞や親鸞の宗教に疑義を持つようなことにはならぬであろう。曇鸞や親鸞は梵文の無量寿経を知らぬけれども同じ浄土教経典の中でも異説が多々ある中から、根本的なもの本質的なものを見出してそれの行方を追求していった。梵文と漢訳との異同についての解釈は、我々自身に課せられた問題である。それは決して語学的な又は歴史的な研究だけで処理せられる性質のものではないことがわかってくるであろう。

さて以上のようだとすると、我々が古来の経疏や研究書に求める所のものも、自然に決まってくる。それらは佛教がそれらの人々において如何に生きているかを示すものであるから、着眼次第で我々に於て佛教が生きてくるその門を開くことになる。そうなってこそこれが佛教史となり佛教学となるものだと私は思う。だがその着眼は人によって異る。その人の宗教体験の巾や深さに応じて人毎に異り、同じ人でも時と共に深浅がある。そういうわけで、単に表面的な理解に止まる限りは人毎に大差はないかも知れんけれども、信念に肉薄すること深ければ深い程、古人の説を解明する学者の見解も個性的とならざるを得ない。この世界に於ては、常に新しいものが精妙で古いものは止揚せられた、ときまらないのである。

私は前に、これから中国佛教を研究しようとする人に向って、先ず中国で重んじられた主な経論を読むように勧めた。そしてそれを梵語の原文と対照したり、成立の段階などを研究しなくてもよいから（不要だというのではない、第一に手をつけるべき仕事ではないというのだ）ともかく漢訳の本で、できるだけ忠実に字義を明かにするようにと言った。そうしてその上で、それらの経に対する古来著名な疏を選んで読むことが要求される。

法華経の（天台智顗による）法華玄義、法華文句
涅槃経の（章安灌頂による）涅槃経疏
維摩経の（嘉祥寺吉蔵による）浄名玄論
勝鬘経の（同じく吉蔵による）勝鬘宝窟
観無量寿経の（善導による）観経四帖の疏
華厳経の（賢首法蔵による）華厳探玄記

など、これらは中国佛教屈指の名著である。論に対する注釈としては、

（曇鸞の）浄土論註　（法蔵の）起信論義記
（吉蔵の）中論疏　（窺基の）唯識述記

などこれら畢生の力作は、大いに心して精読されねばならない。幾度も読み返して、味読されねばならない。急いで早く読みあげようとか、その中から何か早く研究成果をつかみたいとか考えるのは間違っている。精読するというのは、分析して一字一句の意味を明かにすることではない。もとの経や論を横におきながらそれらの注釈書を見て、なぜそうした問題をとりあげたのか、同じくとりあげるにしても、とりあげ方に色々あるはずだけれど、そういうとりあげ方をしたのにはどういう意味があるか、色々の角度から眺めて見なければなるまい。そのようにして全体と部分との関係、表面と底意との均衡、理論と実践との連繋、などが常に大局的に考察される時その研究は知らず識らずのうちに自分の血となり肉となってゆく。佛教精神の所在を忘れて単に素材を操作するだけを任とする技術家のみふえても、それは佛教学の興隆とは別事であることを思えば、以上のような研究方法が著者の本意に沿った学び方でなかろうかと考える。

前に私は教義研究者の必読書を挙げた。支那学の方では、曾つて胡適氏が「一個最低限度的国学書目」を書かれたことがあり、梁啓超氏もまた「国学必読書及其読法」という一書を出しておられる（中南出版社）。中国では「国学基本叢書」というものがあって、一往誰でも必要なものを入手できるからよいが、佛教に関しては重要書が仲々手に入らぬので困る。戦前は為替相場の関係で中国で出た佛書を安く買うことができた。それで和刻本の佛書が高くて手に入らぬわれわれ学生は、北京や上海の功徳林佛経流通処というのを通して、金陵刻経処などで刊行された佛書を大量に買うことができた。今ではその道がない。大蔵経は是非具えたいが、専門研究にはどうしても大字の単行本がほしいので、これから入門する研究者は資本がかかって仲々大変だと思う。資本はともかくとし

てもほしい本を手に入れるのが容易でないから、学生諸君は東京や京都の著名な佛教書店へは常々足を運び、そこの発売書目（例へば其中堂発売書目など）を欠かさず目を通しておくがよい。特に大事なことは組織立った佛教図書の目録をいつも座右に具えておくことだ。例えば、龍谷大学や大谷大学の「図書館和漢書分類目録」などは、なにもその図書館の直接利用者だけでなく、使い方次第では単独にそれだけでも大変役に立つものだ。支那学研究者は、「書目答問」（補正版、中華書局）というものを座右に置く。分類した書名目録で、巻数、著者名、版本の種類等を基本的な書物について列挙してある。龍大や谷大の図書館目録は今の所、書目答問の役目を果すものと言えよう。「大正大蔵経総目録」や、日本大蔵経に附いている解題（二冊）、「大日本佛教全書総目録」等もあると便利だが、佛教全書の中に収められている「佛教書籍目録」二冊は、「大正大蔵経第五十五巻」の目録部と並んで、佛教学研究者にとって古人の業績を鳥瞰させてくれる資料である。

全くの入門者には前に挙げた必読書を素読するだけでも大変だから、先ず望月博士編の「佛教大辞典」で一往のことを調べるとか、「佛書解説大辞典」でそれぞれの経論を引いてみるがよい。又「国訳一切経」にはみな初に解題がついているから、此も必ず見ておくこと。そういうもので予備知識を得てから、ねばり強く素読を初めるのだ。急いではいけない、休んでもいけない。コツコツと読破する忍耐力をつけることが、大事である。